

# 皆の広場

素人の文化考② 「(エッセイ) 瞑想三昧」 自文科 永野 徹

## [1] はじめに

現在、「宗教と科学」は「精神と物質」と言う対立軸で捉えられているが、古代において宗教者は、宗教は勿論、文学・医学・天文学・社会全般について万能者であったのではないのでしょうか。釈迦然り、キリスト然り彼等は、現在で言えば、あらゆる分野のノーベル賞を1人で独占できるほどの能力のある人物であった可能性が高い。私自身は、「一向宗」（一向に構わずと勝手に理解）と言う極めて恵まれた環境に育ちましたので、夏休みに子供会でお寺の読経経験をした程度で恥ずかしながら仏教のことは全く解らず、殆んど無宗教に近い。にも拘らずここ数年、仏教で言う「解脱」とは「悟り」とは「空」とはどのようなことを意味するのか興味が尽きない。勿論そのような超能力を身につけることができるのは、仏教の教理をマスターして、尚且つ相当過酷な修行を完遂できたごく少数の恵まれた才能のある人に限られるであろうと大方の推測はしていますが、そのような境地に到達することが無理な一般の素人に例えば「悟りの境地」とはどのようなことを言うのか感覚的に理解できるものがあれば嬉しいなと単純に思うのです。昔、インドに卓越した能力を会得した坊様（龍樹カールヴェヤ：出家して空の思想“中観”を確立）が隠身の秘術（今で言う透明人間・高度な忍術）を取得して、しばしば王宮に忍び込み宮廷の美人を犯したという何とも羨ましい？不謹慎な話が有りますが、当時のバラモン教徒は既に高度な分身術を身に付けていたと言う事からも瞑想・修行による観想が無碍に夢物語だとは思えない。勿論龍樹はバラモン教他当時のあらゆる宗教をマスターしており、一緒に侵入した友人達が全て殺され自分だけが生き延びれたことを契機に「欲情が苦しみと不幸の全てであると気づき「一切は苦（四聖体）」と説く釈迦の仏門に入ったと言われていました。

## [2] 宗教的瞑想から科学へ

有名な歴史家アーノルド・トインビーが来日していた時「現在における西欧文明の危機を救う唯一の道は、東洋に伝わる瞑想である」と言われたそうで、特にヨーガ、禅、密教、道教に関心が深かった。仏教には、ヨーガとか禅宗など座禅を組んで瞑想する観相学といわれるものがあり、特に密教には実践的感想法があって「仏教の原点は瞑想」と言う。お釈迦様は、六年の研究と修行の艱難辛苦で何も得られず、菩提樹の下で座禅を組み呼吸を整えて、如実にありのままに自分の心の中に天地自然を観ると言う瞑想により、ある日突然大きな境地が開かれたとの伝承があります。このお釈迦様の悟りの状態を密教では「無識身三昧」（あらゆる想念がなくなる）と言い、この時秘密仏が現れ「五相成身観」（ごそうじょうしんかん）を授けたと言う。仏教の瞑想の目的は解脱の知恵を開く為にする。仏教では「戒定慧の三学」と言って、日常生活の中に戒を保ち、瞑想の心の定（じょう）を得ることで智を開く事ができるようになると説く。密教の観相では、お月様の中に金剛杵を観じること、最初は曇っている中にお月様があり、それが段々と雲が晴れてお月様がはっきり現れ金剛杵を観じると広観斂観といって瞑想中のお月様を無限に広げたり、縮小ができるようになる

と言う。この場合無想ではなく、有相の観法をする事で前人未到の境地が開かれる由。密教教典には、鼻の先に月輪、満月の中にオームと言う梵字を観ずることで沈空静寂を破って境地が開けると言う。このような観相学を「阿字観法」と言う。

大日経を根本として、七世紀ごろにできた観法では月輪の中に、梵字、種字を観じる空海は土佐の足摺岬で虚空蔵菩薩を拝む求聞持法（虚空蔵菩薩が金星に権化）を実践し、明星に向って虚空蔵菩薩の真言を百万遍となえることで宇宙と一本化したと言う。密教では蓮華とか月輪等の観相により生命の本源、悟りの境地を感じて「阿字観」を実践する。阿字観の本尊はお月さんと阿字の「梵字と蓮華」である。

阿字観は調心・調息・調身と言う三要素からなっている。調身とはヨガの体操でリラックスすること、調息は息を整えて息を吸って止める呼吸法で気を充実することを指す。注意することは観想する時催眠状態に入るとか遺脱できないらしい。

### [3] 科学と瞑想

#### (瞑想による閃き)

なぜ、瞑想を取上げたのか、その思いは完全に未知の世界へ飛び込むことができる夢があると言う1点につきます。瞑想ワープ技術により未知の世界へ入り込めたら、例えば、宇宙の端がどうなっているのか、ブラックホールの中はどうなっているのか、あの世に渡る三途の川でお花畑が見れるのか、56億7千年後に弥勒如来の世界は成立しているのか・・・等について未知の情報を得る期待ができるから。こんな夢のようなことが瞑想で覗き見ることができれば最高に有意義で、正にノーベル賞以上の価値があると思います。「精神一統何事か成らざらん」の諺どおり瞑想は正に文明・発明・発見の生みの母。観相法による精神力の長時間集中は科学者の研究にも共通する事であり、その結果として発明発見が成されることからあながち馬鹿に出来ないことです。

#### (相対性理論)

ひょっとするとあの天才科学者アインシュタインはお釈迦様と同じ瞑想の達人ではなかったのでしょうか。瞑想で宇宙の端まで旅し、光がブラックホールの近くで重力で曲げられる事を観じて「一般相対性理論」を閃き、理論的に裏づけ数式化できたのでは？光の速度で宇宙旅行をすると時間が延びて再び地上に戻った時点で300年後の世界になっていると言う「浦島太郎物語」もアインシュタインの相対性理論で説明できるとの事。お釈迦様が涅槃に入られてから、次の救世主である弥勒菩薩が現れるまで56億7千万年といわれますが、その根拠は仏様の住む須弥山「突利天」では、地球の1日が400日で、平均寿命が4000歳と言うことから弥勒菩薩が誕生して地上に現れる所要日数は400日\*365日/年\*4000歳=5億8千4百万年後となりますが、多分「突利天」の1日は400日でなく、4000日と修正して約56億7千万年後となる。つまり、お釈迦さんの仏教の世界では2000年以上の昔に、既にアインシュタインの相対性理論で言う時間が延び縮みすると言う概念があったと言えるのではないのでしょうか。勿論、科学的・数学的に理論構成された物理学者の相対時間と宗教家・哲学者の「突利天」の時間・空間とは別次元のことですが。アインシュタインは光の速度をこの世に存在する最高速度、絶対速度≒30万km/sとしてプランク定数から導き宇宙では光速を超える速度は存在しないとなっていますが、最近ではブラックホールへの落下速度は光速を超えているかも知れないと言われてますので、絶対温度(マイナス273℃)なども含めて絶対と言う定数が絶対的なもの

と考えず相対的なものと考えた方が良いのかも知れません。

#### [4] 宇宙は有限か無限か

有限・無限について考える時、ギリシャ時代に以下の有名なパラドックスがある。

##### (ゼノンの公理)

例えば、長さ1mの直線を半分に切る。更に半分に切る。この操作は無限に繰り返すことができるので「直線は無限の集まりである」となる。そうすると「有限の長さ1mは無限の集合となる」から無限と有限は同一であるのかと言う疑問が生じる。数学では直線とは点の集合と定義されているので最小単位である点になると最早切断できなくなるので無限切断はできなくなり線分は無限の集合ではない。

##### (アキレスと亀)

昔から「兎が亀を追い越せるか」と言う面白い話がある。世界で一番足の早いアキレスが100m先にいる亀を走って追い越すことができるか。常識的には間違いなく追越すはずであるが。アキレスが100m地点まで進む間に亀はA地点まで進むとするとこの間に亀はB地点まで進んでいる。次にアキレスがB地点まで進む間に亀はC地点まで進む・・・とこの思考を繰り返すとアキレスは永久にか亀に追いつけないことになる。

##### (宇宙は有限か無限か)

「宇宙は有限か無限か」の命題は日常生活ではどうしてもよい事であるが夜空を眺めてロマンチックな思いに耽っているとふと「悪魔の誘惑」に誘われる事になるかも知れない。

##### a)宇宙が有限の場合：

137億年前のビッグバンで誕生したこの宇宙の最先端部までワープで到達できたと仮定すると色々な疑問が湧いてくる。つまり、宇宙最先端の先には何があるのかあるいは何も無いのか。最先端の先が何も無く空だとしたら宇宙の外は何なのか。仮に宇宙に端があるとすると宇宙はまだ膨張中であるので空間がないと膨張できないので端があってはまずいのでは。(空間は真空か、エーテルか、暗黒物質物質か?)

##### b)宇宙が無限の場合

私達の宇宙がビッグバンで誕生したのであれば、現在膨張中であるから有限になり、その先端には別の宇宙空間が無限に存在することになる。もし宇宙が無限と仮定すると無限を造るために無限の時間がかかり、今現在も宇宙は創造中と言うことになりま。その場合宇宙の集合は無限の広さがあることになり端のない世界は感覚として理解できない。宇宙が無限大の世界だとする理解を超えた哲学の世界になる。

##### c)ホーキング博士の宇宙論

ホーキング博士によると、我々が通常経験している「実数時間軸」では宇宙ビッグバンの瞬間、宇宙の大きさがゼロとなる状態までは遡れないので、ゼロ直前の状態の宇宙に「虚数の時間軸」を導入してこの問題の理論的な説明が可能であると言われるが、現象としてどのような事なのか到底理解できない。博士の理論では「宇宙の大きさは有限であるがどんな境界も持たずに初めも終わりもない」とのことでこれも不可解。

##### (お釈迦様の無記回答)

上述のように、「宇宙が有限か無限か」について私の結論は「無記」です。お釈迦さまに言わせると愚問であるという事です。お釈迦様は、「あの世は存在するのか、否か」と言ったような十の質問には全く説く意味がないと回答を回避された。(これを

「無記」と言う)恐らくこの回答を出すことはこの世が面白くなるとの気遣いと、全能者にとっても難問であるとの婉曲的な回答ではと推測しますが。

(原始仏典):「小マルルクヤ経」、「ボッタバーダ経」、「バッチャゴッタ経」に見えるマルルクヤの仏陀への十の愚問とは次のようなものを言うようです。

四つのカゴリーの難問(十無記とか十四無記と呼ばれる)

(時間)世界は常住であるか、無常であるか(空間)世界に限界はあるのか、ないのか

(霊魂)霊魂は存在するのかもしれないのか。(来世)死後の世界はあるのかないのか

(宇宙方程式)

参考までに、最近の研究成果で宇宙は8次元の宇宙方程式で表すことができるようですが、八つの基本要素は例えば円、矩形、三角形・・・等。方程式によると自分のいる所を出発して真直ぐ進めば宇宙の端まで到達して出発点に帰ってくる閉じた空間であるそうです。そうすると宇宙は端の有る有限な空間となるのでしょうか。奇しくも、中国では古来より八は万能を表す数字で、昔から宇宙は八つの基本要素で成り立っていると言われていたそうです。夢殿の八角形も中国では無限を発想したものであるとのこと。それに預かるようにメールアドレスには **nagano 8 takara** と(8)を採用しました。勿論(8)を横にすると( $\infty$ )にもなります。他にも11次元で表せる宇宙方程式もあるそうです。

数学の超難問で未だに解けていない有名な「ポアンカレ予想」という命題があるようですが、意外なことに理論数学が現実の科学世界に深く関わりがある事が多く、例えば素数のある種の数列和が原子力・核融合と関連する原子核とか、電子の取る不規則なエネルギー軌道を表している言う神の戯れにも驚きます。他にも素数の特異性が暗誦番号として最先端のキュリティ分野に活用されているなど多くの成果があります。

(ゼロの世界)

最後にインドで発案されたゼロの概念について;インドの数学は祭祀と関連して起り、天文学と並行して発達しました。インド人は数に関する感覚が極めて鋭敏で、巨大な数や極小の数が宗教教典や文芸作品にしばしば現れます。これはインド人の空想性と分析性を示していると言えます。このような思索力から紀元前2世紀頃に「零(ゼロ)」の概念を発見しています。零はサンスクリット語でシャニヤ(「空」という意味)と表示されます。またインド人は最も早く十進法による位取りを採用しており、分数の記載方法も発明したと言われていました。ゼロと言う数字は数学の世界では大変重宝な数字であるが、感覚的にはゼロ=無(何も無い)の世界はよく理解できない。無いという事をどうして確認できるのか。何かあるから無の世界も認識できるのではないのでしょうか。無と言う何かがあるのではとの発想は「宇宙に端がある場合の無と言う概念」にも敷衍される。それにしても「ゼロ」は現実生活に欠かせない実に貴重な数字であることに感謝しながらこの随筆を終えることにします。

悩めよ(叩けよ)さらば扉は開かれん! アントレ・ジート

作成 H22.10.26 永野徹

(おわり)